



Socio express

エクスプレス

社会科教育法

社会科実践からみた「小中一貫教育」／高木俊樹 ②

授業実践レポート

生徒の追究意欲を高める“地域教材”を活用した実践／伊藤裕佑 ⑥

博物館と連携してつくりあげる歴史授業／島垣 武 ⑧

生徒の社会的関心を高めるメディアリテラシーの実践／今野 碧 ⑩

教育出版

社会科実践からみた「小中一貫教育」

高木 俊樹

●たかぎ としき／神奈川県秦野市立本町小学校校長

●1. 小中一貫教育が求められる背景

小学校と中学校の「連携」「連関」、あるいは「一貫」した教育の必要性は、ここ十数年で急激に指摘されるようになった。そのような教育の一貫性を求める背景として、小林宏己教授(早稲田大学)は社会における「核家族化の進行と地域社会の崩壊」を指摘する^{*1}。この社会の変化は、子どもたちの幼児期における生活体験の不足をもたらし、かつては地域で普通に見られた異年齢集団による「遊び」「ぶつかりあい」という「群れ」による経験をほとんど消滅させた。地域の子どもたちの「群れ」の喪失やそれがもたらした子どもの個々の生活スケジュール化は、人間関係の認識と調整能力の未発達にもつながった。つまり、かつては「地域」の子どもたちの「群れ」の勢いの中でなされていた原体験や、「群れ」の中で育まれていた社会体験の機会がなくなった今、その「学びの場」を学校において設定する必要が生まれたということである。

文部科学省の中央教育審議会においても、平成26年8月より小中一貫教育特別部会を設け、これまでの小学校、中学校の連携、一貫教育の実践を分析し、これからのあるべき姿を論議し、答申している。その中では、「全国各地で地域の実情に応じた小中一貫教育の取り組みが進められている背景」として、

- 教育基本法、学校教育法の改正による義務教育の目的・目標規定の新設
- 近年の教育内容の量的・質的充実への対応

- 児童生徒の発達の早期化などに関わる現象
 - 中学校進学時の不登校、いじめなどの急増など、中1ギャップへの対応
 - 少子化などに伴う学校の社会性機能の強化の必要性
- の5点を挙げた。

平成17年の学校教育法の改正により、小・中学校共通の目標として義務教育の目標規定が21条に新設された。それを受けて、平成20年に告示された学習指導要領においては、小学校学習指導要領には中学校学習指導要領全文が、中学校学習指導要領には小学校学習指導要領全文が、参考として記載されるようになり、教科などにおいて学校段階間の連携を促進するための工夫が講じられるようになった。このような中で、小・中学校がともに学習指導や生徒指導において互いに協力する観点から、双方の教職員が連続性・系統性に配慮して取り組む機運が高まり、各地域の実情に応じた小・中学校の実践が増加してきたのである。併せて、平成20年の学習指導要領改訂における教育内容や学習活動の量的、質的增加に対応するため、小・中学校の教員の連携による小学校高学年での専門的な指導の充実や、児童生徒のつまずきやすい学習内容について長期的な視点に立ったきめ細かな指導など、学習指導の工夫のために小・中連携した取り組みが見られるようになった、と分析する^{*2}。

そして、冒頭で紹介した小林教授の指摘にあるような児童生徒の発達実態に関わる視点と、

そのことにより生じる児童生徒指導に関わる諸問題、そして学校に求められるようになった社会性育成機能としての役割などへの有効な対応として、地域に応じた小中一貫教育が取り組まれるようになったのである。

●2. 小中一貫教育の取り組みの成果

このような小中一貫教育を先行実施している地域における取り組みの成果についてはどうか。平成26年度に文部科学省は「小中一貫教育についての実態調査」^{*3}を行っている。その中で「大きな成果が認められる」との回答は1割、「成果が認められる」との回答が約8割となっている。

その主な内容としては、

- 学力調査の結果の向上
- 学習意欲の向上、学習習慣の定着
- 授業の理解度の向上、学習に悩みを抱える児童生徒の減少

などといった、学習指導上の成果と、

- 「中1ギャップ」の緩和
- 学習規律・生活規律の定着、生活リズムの改善
- 自己肯定感の向上、思いやりや助け合いの気持の育成

などの生徒指導上の成果があった。連続する異校種が、その学習指導面・生活指導面で円滑な連続性を保障する取り組みに、児童生徒にとつての有効性があることは間違いないであろう。

●3. 社会科指導における小・中学校の差異

しかし、連続性・系統性に配慮した授業実践の取り組みと言っても、実際には小学校と中学校にはその特性から様々な差異がある。具体的には、ほとんどの教科を担当が指導する「学級担任制」である小学校と「教科担任制」である

中学校、「一定程度保障された時間の中で問題解決型の学習を弾力的に行う」ことの多い小学校と「限られた時間の中で計画通りに定められた内容をきっちりと教授する」必要のある中学校、といった差異がある。また、児童の発達段階から小学校では活動型の学習方法が多く取り入れられているが、高校入試を見据えた中学校では講義型の授業形態が多くなりがちになり、授業のスピードも速くなる。とりわけ、社会科学学習においては、この差異がはっきりしており、そのような特性や学習方法が求められる背景を両校種はともに十分認識した上で、連続性・系統性に配慮した取り組みを行う必要があるのは言うまでもない。

では、小・中学校の学び方の差異について、歴史学習における8世紀中ごろの奈良時代の指導法をもとに考えてみよう。

●4. 奈良時代の学習から

小学校学習指導要領では次のように記されている。「イ 大陸文化の摂取、大化の改新、大仏造営の様子、貴族の生活について調べ、天皇を中心とした政治が確立されたことや日本風の文化が起こったことが分かること」^{*4}一方、中学校学習指導要領では「イ 律令国家の確立に至るまでの過程、摂関政治などを通して、大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ、その後、天皇や貴族の政治が展開したことを理解させる。」^{*5}小学校の歴史学習では多くの場合、歴史的人物や出来事をもとに学習問題を設定し、その問題を調べることを通してねらいに迫る問題解決学習で単元を構成する。例えば、この時代について教育出版の平成27年度版教科書『小学社会 6上』でみても。

単元名は「聖武天皇と大仏づくり」、問題設定は「大仏は、どのようにしてつくられたのだろう。」(p.28)である。

この学習を展開するに当たって小学校教師は、例えば新聞紙をつなぎ合わせて、実際の大きさを平面で構成したり、あるいは大仏の顔のパーツ(目、眉、鼻、口、耳)を模造紙で作り体育館に並べてその巨大さを捉えてみたり、と実感的に捉える活動を通して、「聖武天皇はなぜこのような大きな大仏をつくったのだろうか、どのようにしてつくったのだろうか」という問題を設定し、調べ学習に向かわせる。このように問題意識を醸成した上での調べ学習を通して「聖武天皇は仏教の力を借りて人々の不安をおさえ国を守ろうと考え、大陸からの技術を駆使し、多くの農民と大量の物資を全国から集め、国をあげての大仏づくりを行った。」ことに気づかせるのである。単元構成を工夫しながら、必要に応じて弾力的に時間数を調整することもある。

一方、教育出版の平成28年度版教科書『中学社会 歴史』は、学習内容と年間授業時間数を調整しながら、通常原則として見開き2ページを授業1単位時間分の内容として編集している。教科書p.38～39の見開きページの中には、「政治の中心地となった平城京は、どのように栄えたのでしょうか。」というテーマで、政治の中心地であった平城京の様子、阿倍仲麻呂や鑑真といった人物を通しての遣唐使の役割、大陸文化に大きく影響を受けた天平文化の特色、「古事記」「日本書紀」「風土記」「万葉集」といった歴史書や和歌集などの紹介、といった内容を扱っている。小学校で数時間かけて問題解決的に扱った聖武天皇については「…仏教の力で国

家を守ろうと考え、地方には国ごとに国分寺と国分尼寺を建て、都には大仏をまつる東大寺を建てました。」という1文と「東大寺の大仏」の写真資料のみである。中学校の社会科教師は、50分の中でこれらの内容について漏れることなく提示し、資料を活用して考えさせ、理解させることに努めるのである。小学校に比べ学習スピードが速くなり、講義型・黒板整理型の授業形態が多くなりがちになる背景がここにある。

●5. 中学校社会科を実践する上で

どの教科でも同様だが、中学校教師は学区にある小学校高学年の社会科授業を、小学校教師は中学校授業を、1年に一度は見る機会をもつべきである。前述したように小学校の歴史学習は出来事や人物をもとに問題解決型の過程を設定し、調べる、追究する、そしてわかる学習法を大切にしている。中学校の社会科教師の中には、小学校授業を歴史の時代を追いながら知識を確かめていく、いわゆる中学校歴史学習のミニチュア型と思っている人も多い。逆に小学校教師は、中学校教師の、与えられた時間数の中で確実に定まった学習内容を授業で扱い理解させなければならない、という切実性を知るべきある。

さて、このような小・中学校の差異を認識した上で、連続性、系統性を配慮する観点から、中学校の社会科実践で留意してほしいことを二つ提案したい。一つめの留意点は、

生徒たちが小学校で身につけた学び方を中学校社会科授業で有効に機能させる場面設定。

を心がけることである。具体的には、

- ①テーマを設定した調べ学習及び発表学習
- ②少人数グループ学習形態

の2点を授業展開の中で取り入れることを考え

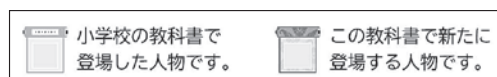
てほしい。前述したように小学校の社会科授業では多くの場合、学習問題を設定し問題解決型の学習を進める。生徒たちはグループで、あるいは個人で「調べる」、そして「発表する」学習を多く経験してきている。中学校の授業では多くの時間を充てることはできないが、1単位時間10分でも15分でもよいので「自ら(グループで)調べる」時間を、それも「○○について調べてみよう」ではなく、「○○は、なぜ(どのようにして)△△したのだろう」型の問題設定のもとで位置づけたい。また、小学校では多くの教科でグループ学習の形態で授業を行う機会が多い。中学校現場でも最近増えてきている、学習問題について考えたことをグループ(4人市松模様型が望ましい)内で意見交換する場、「学びあい」の学習を授業内で取り入れることも小・中学校の一貫性を生かす手立ての一つである。

中学生に「楽しい授業・わかる授業」について問うと、多くの生徒が「自分たちが主体的に取り組める授業」と答える。授業内容と授業時間の関係による有限性はあるものの、可能な限りこの2点に留意し授業を構成することは、学習意欲の向上や学習の定着にも結びつくものであろう。もう一つの留意点は、

生徒たちは小学校歴史学習においてどのような人物、出来事を学んできたのか。

について、中学校社会科教師が授業以前に予め捉えておくことである。機会があれば小学校6年生の教科書を開き、また小学校学習指導要領の内容を確かめることをしてほしい。このことは歴史学習だけではなく、6年生の後半で扱う政治学習と中学校の公民学習との関係でも同様である。因みに、例として紹介した聖武天皇の

単元において、小学校学習指導要領で示されている出来事は、「大仏造営」であり、取り上げる人物は、「聖武天皇・行基・鑑真」である。出版社によっては、最近この観点を編集の工夫として取り上げている教科書も出てきている。教育出版の『中学社会 歴史』では、小学校で扱う人物について以下の図で示すように、登場する単元ごとにわかりやすく色で区別している。



また、導入ページでは、小学校社会の学習指導要領に記載されている人物名をすべて紹介している。このような教科書の特性もぜひ活用したいものである。

● 6. 最後に

「小中一貫教育」実践の本質は「授業力向上」であると考え。生徒の目線に立った授業を構築するにあたっては、「教師はこの学習で生徒に何を学ばせたいのか。」「生徒は今、何を考え、何を求めているのか。」という問いを常に自らに課しながら、実践を重ねることが大切である。生徒が意欲的に取り組む社会科授業、生徒にとっての「楽しい授業・わかる授業」を実践するためにも、小学校で得た「学び」の姿を有機的に授業に機能させることに心がけたいものである。

※1 早稲田大学小林宏己教授の講義資料

※2 中央教育審議会「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について(答申)」

※3 前掲 小中一貫特別部会第8回討議資料

※4 第2章第2節社会第6学年2内容(1)イ 下線筆者

※5 第2章第2節社会 歴史的分野2内容(2)古代までの日本 イ

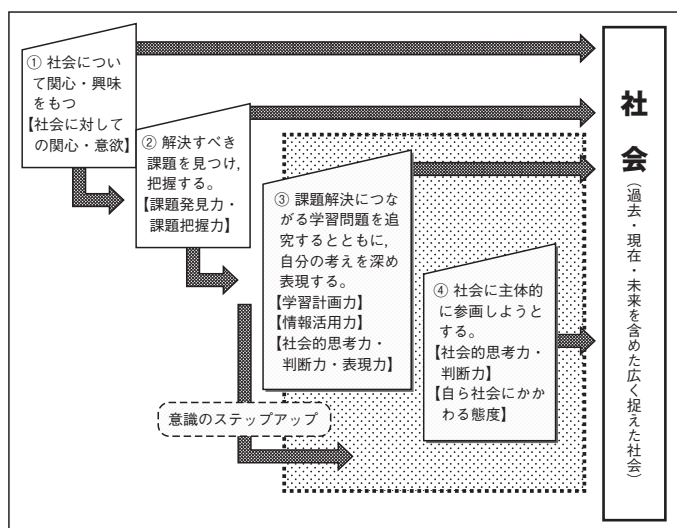
生徒の追究意欲を高める“地域教材”を活用した実践

伊藤 裕佑

●いとう ゆうすけ／岩手県久慈市立久慈中学校教諭

●1. なぜ地域教材か

岩手県社会科教育研究会では、「自ら社会にかかわる子どもを育てる社会科授業の展開」を研究主題に掲げ、児童・生徒の主体的に社会に参画する力を育てることを目指している。その中で「自ら社会にかかわる」児童・生徒像として次のような段階に分けて捉えている。



これらの段階のつながりを意識すると、社会への関わり方が最も強い最終段階の「社会に主体的に参画する児童・生徒」に到達するためには、最初の段階である「社会について、興味・関心をもつ」ことが重要であるといえる。

そこで、生徒が学習内容を自分たちの生活に関係のあることとして捉え、高い追究意欲のもと学習課題に取り組むことができるよう、自分

たちの生活に身近な地域の素材を教材化して授業で用いることにした。

地域教材を用いることには、次のような良さがある。①子どもたちにとって身近であり、親近感をもちやすい。②自分との関わりを意識しながら、主体的に取り組みやすい。③自分の育った地域に対する誇りや愛情が育まれる。④出合いがある。地域との豊かな出合いを、子どもたちに仕組むことができる^{※1}。

親近感をもって主体的に取り組むことはさることながら、自分の住む地域に対する誇りや愛情を育むことになるという。これは学習指導要領の「地域社会の形成に参画し、その発展に努力しようとする態度を養う」ことにもつながる。

また、園田学園女子大学名誉教授の田辺真人氏は「地域教材のよさは、テレビや出版社がまねできないローカルなものを教材化することで、他では絶対に聞けない感動のある授業ができることである」と述べ^{※2}、地域教材の活用が社会科の中では生徒の興味・関心を高めることにつながることを示唆している。

●2. 地域教材を用いた実践

本稿で紹介する実践は中学校地理的分野、世界の諸地域「ヨーロッパ州」の単元の導入として、地域教材を扱ったものである。なお、私が勤務する学校は、NHKの連続テレビ小説「あまちゃん」で一躍脚光を浴び、2011年の東日本大震災では大きな打撃を受けた岩手県久慈市にある。

EU加盟国についてよく
知りたかった。ヨーロッパは
遠いけど、身近に感じた。

久慈市とクライペダ市は遠い所
だけど、つながりを考えていくと
とても身近にいうと思った。

● 3. 成果と課題、今後の見通し

生徒にとって遠い存在でありレディネスの少ない世界の諸地域学習において、地域教材を利用した単元の導入を行うことで、自然とその州の学習に生徒の興味・関心を導くことができた。また身の周りには社会科の学習に有用な教材が多く存在していることを示すことができた。

一方で、教材開発のための時間と労力の問題は軽視できない。どの単元でどのような地域教材を用いることができるかを精査し、生徒にとって扱いやすい教材にする必要があることから、教材研究には多くの手間がかかる。地域ぐるみで教材データの共有化や蓄積を図ることが重要である。

地域の地名、人物、建物…それらすべてが社会科の教材になり得る価値をもっている。そしてそれらを活用することで、生徒の追究意欲を高め公民的資質の育成につながることはもちろんであるが、縁あって赴任した地で、そこでしかできない実践をすることこそ、社会科教員としての醍醐味といえるのではないだろうか。

なお、本研究・実践は久慈市教育研究所社会委員の先生方と共同で行ったものであることを申し添えたい。

- ※ 1 「社会科好きの子どもを育てる授業モデルの研究～学習意欲を高めるための効果的な地域教材の開発を通して～」(高知市立介良小学校教諭 谷田憲一氏、高知県教育センター指導主事 竹内満氏)による。
- ※ 2 全国中学校社会科教育研究大会兵庫大会(平成16年開催)の記念講演「街かど学習のすすめー地域社会で生きる力をー」。出典は「地域教材を活用した中学校社会科カリキュラムの工夫ー置籍校のカリキュラム作成を通してー」(三豊郡山本町、観音寺市学校組合立三豊中学校教諭 詫間克久氏)による。



① クライペダ市から久慈市に贈られた千羽鶴

本時は単元の1時間目の授業で、ヨーロッパ州の学習に対しての意欲を高め、「EU加盟国の人々の生活は、地域統合したことでのどのように変わったのだろう」という単元を貫く学習課題を設定することをねらったものである。地域教材として、①東日本大震災の際に姉妹都市であるクライペダ市(リトアニア)から久慈市に贈られた千羽鶴、②『広報くじ』、③『わたしたちの久慈(小学校副読本)』の3種類を扱った。

本時の初めに、久慈市から遠く離れた場所(直線距離約8200km)にあるヨーロッパ州の一都市クライペダ市から、東日本大震災の際に寄贈された千羽鶴を提示した。日本文化に根付く千羽鶴が、まさかヨーロッパ州にある都市から贈られたものであると予想していない生徒からは、驚きの声上がる。そこで高まった追究意欲を土台にして、本時の学習課題「クライペダ市から久慈市に千羽鶴が贈られたのはなぜだろう」を設定し、予想させる。考えることを苦手とする生徒たちもほとんどが予想を書いており、「過去に久慈市が支援したことへの恩返し」「協定を結んでいて、有事の際には助け合うことになっている」などがあがった。

追究の場面では『広報くじ』と『わたしたちの久慈』の資料を利用して、二都市間の姉妹都市関係について読み取らせた。この活動を通して、ヨーロッパ州という地理的には遠い地域が自分たちの住む久慈市と関わりがあるということを知り、スムーズに単元を貫く学習課題を設定することに成功した。なお、実践後の生徒のまとめからも、ヨーロッパ州への心的距離を縮め、単元を通して学習する意欲が高まったことが読み取れる。

博物館と連携してつくりあげる歴史授業

島垣 武

●しまがき たけし／新潟市文化スポーツ部歴史文化課主査

● 1. はじめに

「学社連携・融合」が提唱されて久しい。学校現場を離れ、歴史博物館等を管轄する行政に携わるなかで、改めて「学社連携・融合」の重要性を感じている。

本稿では、「学社連携・融合」の一つの試みとして、前任校において、新潟市歴史博物館の学芸員と連携して行った授業実践「天保の改革と新潟上知」(第2学年)を紹介したい。なお、「学社連携・融合」にはいくつかのタイプがある。本実践は、学校教育が中心になって社会教育の側に協力を呼びかけ、効果的な教育活動の展開を目指した例である。

● 2. 授業実践

本単元は、学習指導要領・歴史的分野の内

容(1)イ「身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、歴史の学び方を身に付けさせる」に関わる実践である。

(1)単元の目標

水野忠邦による「天保の改革」の一環である「新潟上知」に伴い、初代新潟奉行として派遣された川村修就の政策や背景を追究することを通して、江戸幕府が外圧・内圧の両面から行き詰まっていたこと、また、新潟が日本海側の重要な拠点の湊であったことを説明することができる。

(2)単元の構想(全7時間) ※下表を参照。

(3)学芸員との連携

時間	課題・テーマ	学習活動・学習内容	教師の働きかけ(手だて・支援)
1 2	新潟上知に伴って派遣された川村修就は、どんなことをしたのだろうか。	○天保の改革の一環として新潟上知があったこと、初代新潟奉行に川村修就が就任し、様々な政策を行ったことを知る。 ○新潟市歴史博物館を訪問し、川村修就に関する展示を見学しながら、学芸員から説明を受ける。	○西海岸公園にある川村修就の銅像や石碑の写真を提示し、関心をもたせる。 ○気づいたこと、わかったこと、疑問に思ったことを記述させて、意識づけを行う。 ○生徒の疑問をふまえ、展示資料をもとに、当時の新潟の様子や川村修就の政策について、学芸員から説明してもらい、新潟の上知が成功した理由について関心をもたせる。
3 4 5	新潟の上知がうまくいったのはなぜだろうか。	○学習課題を解決するため、「国内の動き」、「新潟の状況」、「外国との関わり」、「修就の政策・人物像」等の視点から追究テーマを設定する。 ○学習課題の解決に向けて、資料をもとに各自のテーマについて追究し、レポートを作成する。	○「新潟の上知がうまくいったのはなぜだろうか」という学習課題を設定し、解決するための視点を、学習班ごとに話し合わせる。 ○いくつかの視点を示し、それぞれの追究テーマを設定させる。 ○追究活動にあたり、参考となる文献資料を用意する。
6	追究してわかったことは、それぞれどのように関わっているのだろうか。	○学習班ごとに、追究活動で出てきた具体的な事実をもとに、グルーピングやラベリングを行って関係図を作成し、それぞれのつながりを明確にする。	○個々で追究した内容を共有化させるとともに、それぞれの関わりを明らかにできるよう、学習班ごとに付箋を用いて関係図を作成させる。 ○よりよい関係図が作れるよう、学芸員から各班にアドバイスをしてもらう。
7	新潟の上知が成功した理由を自分の言葉でまとめよう。	○学習課題「新潟の上知がうまくいったのはなぜだろうか」に対する結論を、自分の言葉でまとめる。 ○新潟の上知が成功した理由を、幕府や国内の状況、諸外国との関わり等をふまえて捉える。	○学習課題に対する自分の結論をまとめさせる。その際、他の事実や他者の考えを結び付けられるよう、関係図の作成を通して得られた様々な事実や他者の考え、学芸員のアドバイス等をふまえて記述させる。

① 単元の構想

授業案の作成段階において、単元構成を考
えるところから学芸員に協力してもらい、学
芸員が参加する場面をともに検討する。この
ことで、「学芸員が関わる必然性のある場面
はどこか」、「新潟上知は歴史的にどのよう
な意義をもつのか」など、より幅広い視点から
単元の構成を組み立てることができる。

本単元においては、学芸員に参加してもら
う場面を、以下のように2回設定した。

①課題設定、問題意識を醸成する場面

博物館を訪問した際、展示資料や映像をも
とに当時の新潟の様子や川村修就の政策の概
要を説明してもらおう。さらに、天保の改革の
中で唯一成功した上知である等、学芸員なら
ではの話をしてもらい、新潟上知に関心をも
たせ、新潟の上知が成功した理由を知りたい
という意識をもたせる。

②学習内容の獲得、展開の場面

各自の追究活動でわかった川村修就の政
策、当時の新潟、国内外の状況について関係
図を作り、それぞれの関わりを明らかにする
活動に参加してもらおう。関係図作りで行き詰
まっている班への支援とともに、よりよい関
係図が作れるようアドバイスしてもらおう。

(4)結果と考察

授業後のアンケートで、学芸員との関わり
について、9割の生徒が「とても役に立った」、
「役に立った」とし、「抜け荷事件のことに
ついて詳しく説明してもらえた」、「新潟で起
きていたことと他のできごとがつながっている
ことがわかった」、「これとこれが関係あるの
か!という発見があった」等の感想があった。

一方、「あまり役に立たなかった」とする

生徒は、「あまりアドバイスがもらえなかつ
た」、「話が難しくてよくわからなかった」と
いう理由だった。よりよい関わり方について
さらに検討する必要がある。

単元の終末で「新潟の上知が成功した理由」
について、ある生徒は以下のように記述して
いる。

「抜け荷事件が起きたことをきっかけに、ゆ
らぎ始めた幕府の体制を立て直そうとしたか
らだと思う。新潟は西廻り航路が盛んで、外
国船の接近の可能性もあって、日本海側の重
要な湊だった。そのため、新潟を上知するこ
とで、町の治安をよくして安定させようとし
たと思う。川村さんは密貿易を阻止したほか、
砂防、海防、物価の安定などにも努め、新潟
の治安をよくした、すごい人だと思った。」

それぞれの生徒の記述の中には、必ずしも
十分な捉えとは言えないものもあるが、複数
の視点を結びつけた記述が多くみられ、新潟
上知との関わりから幕府政治の行き詰まりを
捉えることができたと考える。

●3. おわりに

授業案の作成段階から学芸員と打ち合わせ
を密に行い、複数回にわたって授業に参加し
てもらうことで、生徒の実態を学芸員も把握
でき、個別支援の仕方等も含めて、効果的な
支援ができるようになる。

今回の実践は特設単元で行ったものである
が、継続的な取り組みによって、より一層そ
の効果が期待できる。年間指導計画の中に位
置づけるとともに、博物館においてもプログ
ラムを作成する等、学校と博物館等の施設が
さらに「協働」していく必要があると考える。

生徒の社会的関心を高めるメディアリテラシーの実践 ～NIEを事例に～

今野 碧

●このの みどり／北海道釧路市立春採中学校教諭

●1. これからの社会を生きるためには

選挙権年齢が引き下げられることとなった。若者にはこれまで以上に、政治に関心をもち、メディアを批判的に読み解く力や自分の考えをもって社会に関わる力を身につけることが必要になるといわれている。

ところが現実には、若者の選挙離れは深刻な課題である。少子高齢化が進む社会においては、高齢者優先の政策がとられやすい。若者が政治や選挙に無関心であることは、若者世代の意見を政治に反映させる機会を狭めることになる。若者にとっても暮らしやすい社会にするためには、若者自身が政治や選挙に関心をもち、まず大切である。

若者の政治や選挙に対する関心を引き出し、未来の有権者として育てるためには、どのような方法が有効なのだろうか。昨今、色々な手法が提案されているが、特に注目しているものとして、メディアリテラシーという考え方がある。メディアが発信する情報を客観的に捉え、それが妥当なものなのかどうかを調べたうえで自分の考えを作り、発信する力のことである。

授業でメディアリテラシーを鍛えれば、生徒の受動的な学びの姿勢を能動的な学びの姿勢へと転換できる。自己有用感を基盤に社会性の基礎を築いていくこともできる。

教科書では、NIEの実践とともにメディアリテラシーの育成を図る特集ページが設けられて

いる(『中学社会 公民 ともに生きる』pp6-9参照)。上記の課題解決を目指してNIE実践の一つのあり方を提案したい。

●2. 授業設計の視点

生徒は、小学校段階から、教科を横断してNIEの実践を経験している場合が多い。

中学校社会科での授業の工夫としては、特に次の二つの視点を意識させることが想定できる。一つは、情報を受け取る側の視点であり、もう一つは、情報を発信する側の視点である。これらの二つの視点を生徒が日頃からあわせ持つことができれば、情報をより客観的に捉えることができるようになり、社会的事象に対する興味・関心をもつことができるようになる。

本稿で提案する授業は、情報を受け取る側の視点／発信する側の視点の両方を組み込んだ実践である。

●3. 授業実践例

社会科の授業では、社会に関する様々な認識を取り扱う。そこで本授業では、生徒に、情報を受け取る側と発信する側の間にはどのような認識の「ずれ」が生じる可能性があるのかを体感させる。

私たちが情報を受け取るまでには、次のようなプロセスと背景がある。メディアは世の中に無数に存在する情報を、自らの主張をふまえて取捨選択し発信している。さらに私たちがメディアから受け取った情報を、主観的に取捨選

損し、意味づけ、第三者に発信する場合がある。生徒(私たち)は、大量にある情報は常に誰かの手によって集約／編集されたうえで発信されているということを理解しておく必要がある。

本授業では、2社の新聞を用いて、情報を比較しながら読み取り、根拠を確認したうえで自分の考えを述べることを目指す。

課題設定の場面では、同じ事象を取り上げている複数の新聞社の一面を比較し、取り上げている事象の概要を掴む。次に本時の課題「情報を発信したり受け取ったりする際にはどのようなことに気をつける必要があるのか」を提示する。

課題追究の前半は、一面で取り上げられた事象について、関連記事から様々な他者の意見を読み解いていく。「読者の声」などを取り上げると他県の中学生の意見なども知ることができるので、生徒の事象に対する関心も高まるようである。

次に、読み解いたことを踏まえて、事象に対する自分の意見を根拠づけながらワークシートにまとめ、グループ内で発表する。メンバーは、発表された内容について、聞いてわかったことを限られた文字数でワークシートに要点整理する。文字数を限定することで、生徒は情報を加工し表現せざるを得ない。この作業を経験することで、情報は常に誰かの手によって集約／編集されていることに生徒は気づくことができる。

課題追究の後半では、情報の受け手が、受け取った情報を整理し、最初に発信された情報との照合を行う。ここで、発信した情報がどの程度受け手に伝わっていたのか、例えば4段階で評価を行う。そして、自分が発信した情報はどの程度伝わったのか、自分が伝えたい情報が伝

わらなかったのはなぜか、情報が媒体から媒体に移動する際にはどのような意図が働いているのか、といった点について考察を行う。

最後に課題解決の場面である。情報を発信したり、受け取ったりする際にはどのようなことに気をつける必要があるのか問いかける。情報を受け取る際には、発信する側が意図する／しないにかかわらず、主観を踏まえて多くの情報から取捨選択したうえで、発信していることを確認する。自分が発信する側に立つ場合には、そうした特性を意識してふるまう必要があることを共通認識として全体で共有する。

●4. おわりに

こうしたメディアリテラシーの考え方を取り入れた一連の授業実践によって得られた成果は次の三点である。

①メディアを効果的に活用することによって政治や選挙に対する生徒の興味関心を引き出すことができた。②情報を受け取る側と発信する側双方の視点を授業に位置づけることによって、情報を客観的に捉えたり、発信したりする力を伸ばすことができた。③他者に与える影響をそれぞれが実感する能動的な学びを取り入れることによって、自己有用感を高め社会に参画する初期段階を形成することができた。

学校教育では、未来の有権者として必要な認識や判断力、表現力等を発達段階に応じながら身につけさせることが求められる。

メディアとりわけ新聞を、他教科や小中高での連携のもとに活用し、子どもたちが多様な見方・考え方を身につけられるようにすることが、これからの社会を生きていく生徒にとって大切であると考えている。



第14回

地球となかよし メッセージ

作品募集 (2016年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真 (またはイラスト) にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生 (数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2016年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品 テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境 や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交 流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会
◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

前回
入選作品



受け継がれる伝統と心

私は中学校で、かるた部に所属しています。私がかかる
たを始めたのは小学校四年生の頃です。私はこのときか
ら、かるたが好きです。理由は、男女も年齢も関係なく、
平等な立場で試合に立ち向かえるからです。また、いろ
いろな年代の方と話したり、仲良くなったりできるとこ
ろも、試合をしている全員が、古くからある百人一首を
一生懸命とっている姿も私のお気に入りです。百人一首
が現在まで残っているのは、日本人が百人一首を大切に
してきたからだ、私は思います。なので、私も大好き
な百人一首をこれから先も残していけるように、かるた
を続けていきたいです。

【表紙写真】モロッコ南部に位置するアイト・ベン・ハッドウ。高い城壁に囲まれた日干し煉瓦造りの集落で、内部にモスクや家々が並ぶ(上写真)。迷路の町ともよばれるフェズ旧市街にあるブー・ジュールド門。青や緑のタイルによる幾何学模様の装飾が施されている(下写真)。〔2014年 モロッコ〕

中学社会通信 Socio express (2016年 春号)

2016年3月31日 発行

編集: 教育出版株式会社編集局
印刷: 大日本印刷株式会社

発行: 教育出版株式会社 代表者: 小林一光
発行所: 教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社	〒060-0003 札幌市中央区北3条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所	〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング 3F TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社	〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社	〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社	〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社	〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社	〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社	〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室 TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
沖縄営業所	〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411